

公園整備による便益及び管理施設の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

枝 松 遺 跡

-11次調査-

2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

公園整備による便益及び管理施設の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

枝 松 遺 跡

-11次調査-



2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



卷頭図版 調査地全景（南より）

序

本書で報告する枝松遺跡 11 次調査は、公園整備に伴う調査です。これまで枝松遺跡では、道路関連の開発に伴う発掘調査を中心に 10 次にわたる調査が行われ、弥生時代後期の竪穴住居など貴重な遺構・遺物が数多く見つかっています。枝松遺跡の東に接する東本遺跡でも多数の竪穴住居が見つかっており、両遺跡一帯に大規模な集落が営まれていたことがわかつてきました。今回の調査地は、その集落の南部に位置しています。

調査では、弥生時代から中世に至る遺構・遺物などが見つかりました。なかでも弥生時代後期の竪穴住居 1 棟を確認することができ、枝松遺跡に展開する集落南部の様相と広がりを知る事ができました。

このような成果を挙げることができましたのも、調査にご協力いただきました各方面のご理解とご協力のたまものであり、心より感謝申しあげます。本書が、埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、文化財保護・教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成 21 年 3 月 31 日

財團法人松山市生涯学習振興財團
理事長 中 村 時 広

例　言

1. 本報告書は、松山市枝松四丁目 229 番 1 の一部外（枝松公園内）において松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財團 埋蔵文化財センターが実施した枝松遺跡 11 次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、松山市都市整備部公園緑地課により計画・実施された「枝松公園」における公園整備による便益及び管理施設の建設に伴う事前調査として、2008（平成 20）年 3 月 17 日～2008（平成 20）年 5 月 31 日までの間に実施された。
3. 遺物の実測・製図、遺構図の製図等は、岩本美保、村上真由美、佐伯利枝が行った。
4. 遺構の撮影は、大西朋子、栗田茂敏、担当調査員が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。
5. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
6. 本書で使用した弥生土器、青磁の編年については弥生土器を『弥生土器の様式と編年・四国編』「伊予中部地域」梅木謙一 2000、青磁は『九州歴史資料館研究論集』4 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について - 形式分類と編年を中心として - 」森田勉・横田賢次郎 1978 を参考にした。
7. 遺構は以下の略号で記した。
竪穴住居：S B　　土坑：S K　　柱穴：S P　　溝：S D
8. 使用した方位は、国土座標第IV系に基づく座標北（世界測地系）を基本とする。
9. 本報告にかかる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されている。
10. 本報告の執筆・編集は、相原浩二が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 刊行組織	2
3. 環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	3
第2章 調査の概要	7
1. 試掘調査	7
2. 調査区の設定	7
3. 調査の経過	7
4. 層位	9
5. 遺構と遺物	9
(1) 1区の調査	12
(2) 2区の調査	12
(3) 3区の調査	13
(4) 4区の調査	14
(5) 5区の調査	14
(6) 6区の調査	14
(7) 7区の調査	19
(8) 8区の調査	21
(9) 9区の調査	21
(10) 10区の調査	21
第3章 まとめ	22

挿図目次

第1図 調査位置図	1	第11図 5区測量図	14
第2図 調査地と周辺の遺跡	4	第12図 6区測量図	15
第3図 調査区位置図	8	第13図 S B 1測量図	16
第4図 1区～5区土層図	10	第14図 S B 1出土遺物実測図	16
第5図 6区～10区土層図	11	第15図 S P 5測量図	17
第6図 1区・2区測量図	12	第16図 S P 5出土遺物実測図	17
第7図 2区表採遺物実測図	12	第17図 4区・7区測量図	18
第8図 3区測量図	13	第18図 S D 1測量図	19
第9図 S K 1測量図	13	第19図 8区・9区測量図	20
第10図 S K 1出土遺物実測図	13	第20図 10区測量図	21

表 目 次

表1 2区表採遺物観察表土製品	23	表5 壴穴式住居一覧	24
表2 S K 1出土遺物観察表土製品	23	表6 土坑一覧	24
表3 S B 1出土遺物観察表土製品	23	表7 溝一覧	24
表4 S P 5出土遺物観察表土製品	23	表8 柱穴一覧	24

図 版 目 次

巻頭図版 調査地全景（南より）

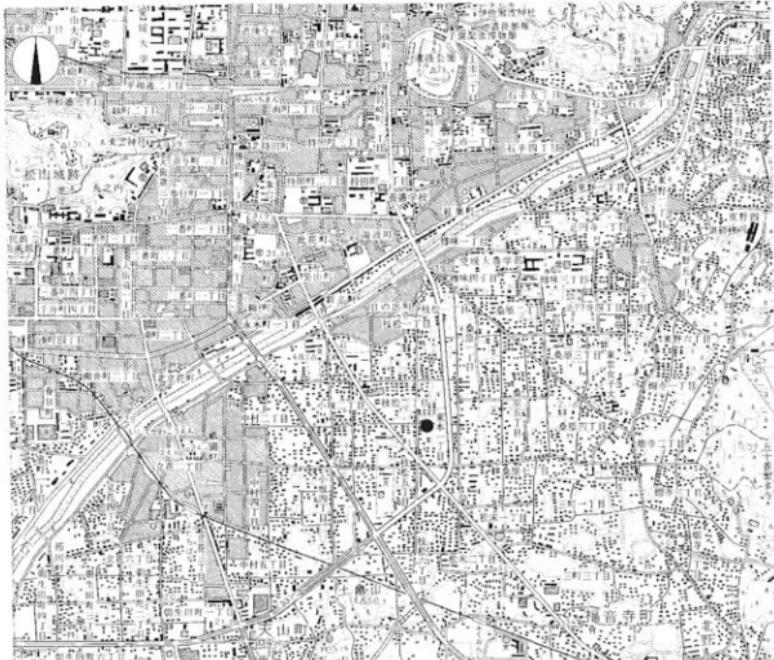
図版1	1. 調査前風景（南西より） 2. 1区完掘状況（西より）
図版2	1. 2区完掘状況（南より） 2. 3区全景（北より）
図版3	1. S K 1検出状況（北より） 2. 4区全景（南より）
図版4	1. 5区完掘状況（東より） 2. 6区遺構検出状況（南より）
図版5	1. S B 1検出状況（南東より） 2. S B 1完掘状況（南西より）
図版6	1. 6区倒木土層（西より） 2. 6区完掘状況（南西より）
図版7	1. 7区遺構検出状況（南より） 2. S D 1検出状況（南東より）
図版8	1. 7区完掘状況（南より） 2. 8区完掘状況（西より）
図版9	1. 8区完掘状況（南東より） 2. 9区完掘状況（南東より）
図版10	1. 遺跡検討会風景（南東より） 2. 6区～10区完掘状況（南より）
図版11	1. S B 1出土遺物 2. S K 1出土遺物、S P 5出土遺物、2区表採遺物

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

松山平野の北東部、高龜山塊から流れる石手川の左岸に枝松遺跡は所在する。調査地である枝松は、古来より桑原地区と呼ばれ縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く見つかっており、松山平野の中でも有数の遺跡地帯となっている。近年の調査では市道東部環状線や中村桑原線の道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査が行われ、弥生時代後期の集落関連の遺構・遺物などが多数見つかり多大な成果をあげている地域となっている。このような遺跡が見つかった東部環状線より西へ約100m、中村桑原線より南へ約100mに枝松公園は所在している。

2007（平成19）年5月9日、都市整備部公園緑地課（以下、公園緑地課）より枝松公園整備による便益及び管理施設の建設に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.83 枝松遺物包含地」内にある。申請を受けた文化財課は、公園緑地課と協議の結果、試掘調査を実施する事となった。試掘調査は文



第1図 調査地位置図 (S=1:25,000)

化財課指導のもと（財）生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）が2007（平成19）年5月30日に行った。調査の結果、弥生時代と中世の遺構・遺物が見つかり弥生時代と中世の集落関連遺跡があることを確認した。

この結果を受け公園緑地課と文化財課は、本格調査にかかる協議を行い、工事により遺跡が失われる部分について記録保存のため本格調査を実施する事となった。調査は埋蔵文化財センターが主体となり、公園緑地課の協力のもと2008（平成20）年3月17日から同年5月31日までの間に実施した。

2. 刊行組織

松山市教育委員会 事務局	教育長 企画官 企画官 企画官 文化財課 課長 主幹 主幹	山内泰 石丸修 仙波和典 古錄靖 岸紀明 家久則雄 森正経 森川惠克
(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター	理事長 事務局長 所長 次長 次長 調査担当リーダー 教育普及担当リーダー 調査担当 写真担当	中村時広 吉岡一雄 丹生谷博一 折手均 重松佳久 栗田茂敏 梅木謙一 相原浩二 大西朋子

調査地 松山市枝松四丁目229番1の一部外（枝松公園内）

調査面積 約350m²

調査期間 2008（平成20）年3月17日～同年5月30日

3. 環境

(1) 地理的環境

松山平野は、主に一級河川である重信川によって形成された扇状地である。その支流である石手川は、高龜山塊の水ヶ峰に源を発し平野の北東部を南西方向に流れ、小野川と重信川に合流し伊予灘に注ぐ河川である。石手川は、平野への入り口である岩堰から江戸時代のはじめに河川の改修によって流路を替えられ現在に至っている。枝松遺跡は、この石手川中流域の左岸に立地し石手川によって形成された扇状地上に展開している。本調査地は、その扇状地上の標高 32.20 m に立地する。

本遺跡のある扇状地面は、約 23,000 年前の姶良（A.T.）の降下・堆積期にはすでに段丘化していたと推定されている。その後は部分的に小規模な洪水があったものの、石手川本流による激しい洪水に襲われることなく、縄文時代や弥生時代の遺跡の立地については、安定した地形環境であったとされている [平井 1989]。近年、周辺域は水田が開けていたが、都市的開発が著しい地域となり水田も少なくなっている。

(2) 歴史的環境

本遺跡周辺では、開発による埋蔵文化財の発掘件数の増加に伴い数多くの遺跡が存在し、注目される遺構・遺物がたくさん見つかっている。これまでの調査で弥生時代～古代にかけての竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝などの集落遺構のほか、東の丘陵部では古墳時代中期～後期の古墳が多数検出されている。調査地の北東部にある樽味町内では『貨泉』の出土があった樽味立派遺跡、「船」を描いた弥生時代後期の線刻土器が出土した樽味高木 3 次調査、古墳時代初頭の大型掘立柱建物が見つかった樽味四反地遺跡 6 次、8 次、13 次調査など貴重な遺構・遺物が見つかっている。ここでは近年に調査された枝松町内と隣接する東本町、桑原町の遺跡を中心に時代毎の遺跡を概説する事とする。

縄文時代

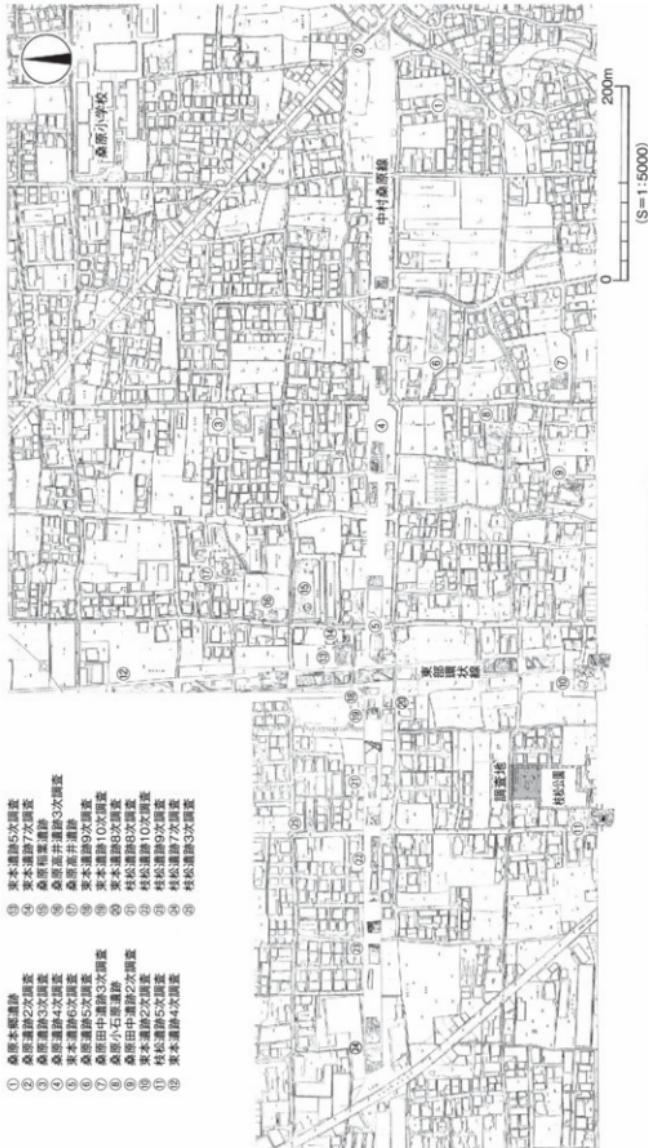
東本遺跡 4 次調査では、縄文早期にあたるアカホヤ火山灰の層中と下層の上面から先土器時代末から縄文時代早期以前の石器が見つかっている。また、アカホヤ以前の堆積層中から焼土を検出している。これらのことから縄文時代早期以前の遺跡が存在したことが想定されている [高尾 1996]。晩期では桑原田中遺跡で突帯文系の深鉢片が一点出土している。

弥生時代

前期では桑原田中遺跡 2 次調査で土器片を検出している [梅木・山本 1994]。桑原遺跡 4 次調査では自然流路 S R 401 より前期と考えられる大型の石包丁が出土している [相原・武正 2005]。

中期では枝松町、東本町、桑原町とも遺物は散見されるものの明確な遺構は少ない。枝松遺跡 6 次調査では中期後半の土坑 2 基を検出している [加島 2007]。中期後半～後期初頭にかけての遺構は桑原地区内では標高の高い北東部の樽味町で検出されている。樽味高木遺跡 2 次調査 [栗田 1994]、樽味四反地 5 次調査 [高尾 2002]、樽味高木 7 次調査では大型円形竪穴住居や小型の方形住居を検出している。樽味高木 9 次調査では中期後半の掘立柱建物 1 棟、土坑 2 基を検出している。樽味四反地 7 次調査では土坑 2 基を検出している [加島 2007]。

後期では桑原田中遺跡で素掘りの井戸と考えられる S K 1 より後期後葉の一括性の高い遺物が出土している [松村 1992]。桑原高井遺跡では竪穴住居 5 棟、土坑、溝を検出している。竪穴住居の平面



第2図 調査地と周辺の道路

形は円形と方形があり、そのうちSB2はベッド状遺構を付設し六角形を呈している〔森1980〕。桑原高井遺跡3次調査では後期末と考えられる中型の円形堅穴住居SB001を検出している。SB001の全容は不明であるが「張り出し部」を伴うものとも考えられている〔小笠原2003〕。桑原稻葉遺跡では円形と方形の堅穴住居が検出されている。方形堅穴住居からは後期終末の土器が出土している〔岡田他1990〕。後期後葉～末の堅穴住居の枝松遺跡3次調査で後期後葉の隅丸方形住居にベッド状遺構を付設する堅穴住居1棟を検出している〔梅本1992〕。調査地の南に隣接する枝松遺跡5次調査では、後期後葉の方形堅穴住居1棟と円形周溝状遺構を検出している〔河野1997〕。枝松遺跡8次調査では方形堅穴住居2棟、溝、土坑を検出している。方形堅穴住居SB201の埋土より廃棄された多量の土器が出土している。これら土器群のはか、注目する遺物として皮袋形土器1点、破損品であるが環状石斧1点が出土している。枝松遺跡10次調査のSD301より後期前葉から末の遺物が出土している〔相原・武正2008〕。東本遺跡では堅穴住居の一部と溝状遺構が検出されている。東本遺跡2次調査では堅穴住居2棟、土坑、掘立柱建物などが検出されている。堅穴住居の平面形態は方形と円形の2種類があり、いずれにもT字状の炉址が備えられている〔森1986〕。桑原高井遺跡3次調査では後期末と考えられる中型の円形堅穴住居SB001を検出している。SB001の全容は不明であるが「張り出し部」を伴うものとも考えられている〔小笠原2003〕。東本遺跡4次調査では大型・中型・小型の堅穴住居19棟を検出している。このうち注目するものに周堤帯を検出した大型の円形堅穴住居SB203、破鏡が出土した大型円形堅穴住居SB302がある。報告書では調査で得られた資料をもとに住居規模・形態・構造・住居変遷について論じられている〔高尾1996〕。東本遺跡5次調査では円形堅穴住居5棟、方形堅穴住居2棟が検出されている。このうち方形堅穴住居1棟を除く全てにベッド状遺構が付設されている。東本遺跡6次調査では大型の円形堅穴住居1棟と方形の堅穴住居1棟を検出している。方形の堅穴住居は、鍛冶関連遺構の可能性をもつ。大型の円形住居は後期末に、方形堅穴住居は後期後葉とされる。東本遺跡7次調査では方形堅穴住居2棟と大型円形堅穴住居1棟を検出している。このうち方形堅穴住居1棟を除く2棟は、東本遺跡5次調査で検出されている大型円形堅穴住居と方形堅穴住居の東部分である〔河野2004〕。東本遺跡8次調査では後期末のベッド状遺構を付設した方形堅穴住居1棟を検出している〔宮内2007〕。東本遺跡9次調査では後期後葉の大型の円形堅穴住居SB1を検出している。このSB1はベッド状遺構を付設している。埋土中には多量の土器が廃棄されている〔相原2008〕。東本遺跡10次調査は後期後葉の土坑1基と後期末のベッド状遺構を付設し貼床をもつ大型の円形堅穴住居1棟を検出している。堅穴住居はベッド状遺構部と住居基底面に遺存する周壁溝の形状から方形堅穴住居から円形堅穴住居への建替えが想定されている〔相原2008〕。

古墳時代

前期では桑原遺跡3次調査の溝より弥生時代末～前期の遺物が出土している〔相原2001〕。桑原遺跡4次調査の自然流路SR401では溝の埋土より前期～後期の遺物が出土している〔相原・武正2005〕。枝松遺跡7次調査のSD101より初頭の遺物が出土している。このSD101を切る土坑2基より前期の甕が出土している〔相原2008〕。

中期では桑原田中遺跡で須恵器博形甕が出土している。桑原本郷遺跡では堅穴住居、掘立柱建物が検出されている。そのほか包含層中より須恵器と併に滑石製の白玉100点余りが出土しており祭祀遺構と考えられている〔栗田2002〕。

後期では桑原町内に前方後円墳である三島神社古墳、経石山古墳が存在する。三島神社古墳は宅地

造成により発掘調査が実施され初期畿内型の横穴式石室を内部主体にもつ全長45mの前方後円墳である〔森1986〕。桑原遺跡5次調査では杓子状木製品、木鍤、斎串が出土している〔吉岡2004〕。

古代

東本遺跡6次調査では、古代末に埋没したと考えられる川幅が30mを超える自然流路S R 201を検出している。S R 201の埋土より近江系の縁袖が出土している〔相原2005〕。

中世

桑原田中遺跡3次調査では土坑状遺構を検出している〔山本1997〕。桑原遺跡2次調査で溝、土坑を検出している。土坑S K 1より土師器椀、瓦器、青磁が出土している。桑原遺跡4次調査4区では、祭祀遺構と考えられる柱穴1基を検出している。3区では掘立柱建物や土坑、溝を検出している。桑原高井遺跡では「首塚」とされる土坑墓が数基検出されている。東本遺跡6次調査でも同様な土坑墓1基を検出している〔相原・武正2005〕。桑原遺跡5次調査では掘立柱建物4棟を検出している〔吉岡2004〕。枝松遺跡4次調査では、土坑S K 1より松山平野では珍しいほぼ完形の茶釜が出土している〔大森1996〕。枝松遺跡7次・9次・10次調査で土坑、柱穴を検出している。

〔参考文献〕

- 森 光晴 1972『三島神社古墳』松山市教育委員会
 松山市史料集編集委員会 1980松山市史第1巻抜刷 自然編
 森 光晴 1980「桑原高井遺跡」「浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡」松山市文化財報告書14
 1986「東本遺跡」「経石山古墳」「愛媛県史 資料編 考古」
 岡田 敏彦 1990「桑原稻葉遺跡」「桑原住宅埋蔵文化財調査報告書」
 松村 淳 1992「桑原田中遺跡」「桑原地区的遺跡」松山市文化財報告書26
 梅木 謙一 1992「枝松遺跡3次調査」「桑原地区的遺跡」松山市文化財報告書26
 梅木・山本 1994「桑原田中遺跡2次」「桑原地区的遺跡Ⅱ」松山市文化財報告書46
 栗田 正芳 1994「博味高木遺跡2次調査地」「桑原地区的遺跡Ⅱ」松山市文化財報告書46
 高尾・大森 1996「東本遺跡4次調査地」「東本遺跡4次調査地・枝松遺跡4次調査地」松山市文化財報告書54
 河野 史知 1997「枝松遺跡5次」「桑原地区的遺跡Ⅲ」松山市文化財報告書58
 山本 健一 1997「桑原田中遺跡3次」「桑原地区的遺跡Ⅲ」松山市文化財報告書58
 相原 浩二 2001「桑原遺跡3次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報12」
 栗田 茂敏 2002「桑原本郷遺跡」「桑原地区的遺跡Ⅳ」松山市文化財報告書86
 小笠原 彰 2003「桑原高井遺跡3次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報14」
 吉岡 和哉 2004「桑原遺跡5次調査地」松山市文化財報告書99
 河野 史知 2004「東本遺跡7次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報16」
 相原・武正 2005「東本遺跡6次・桑原遺跡2次・桑原遺跡4次」松山市文化財報告書105
 加島 次郎 2007「枝松遺跡6次調査」「東野森ノ木遺跡1・2・3・4次調査地 他」松山市文化財報告書117
 宮内 憎一 2007「東本遺跡8次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報19」
 相原 秀人 2008「東本遺跡9次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報20」
 相原 浩二 2008「東本遺跡10次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報20」
 相原・武正 2008「枝松遺跡7次調査」「枝松遺跡-7次・8次・9次・10次-」松山市文化財調査報告書125

第2章 調査の概要

1. 試掘調査

試掘調査では、トレント4本を設定し調査を行った。このうち北側2箇所のトレントより、柱穴や土器片を検出した。公園南側の2箇所のトレントからは遺構・遺物とも検出されなかった。このため公園北側には、検出した遺構・遺物や地形的な概観と周辺遺跡の遺存状況などにより遺跡が存在するものと考えられた。

2. 調査区の設定

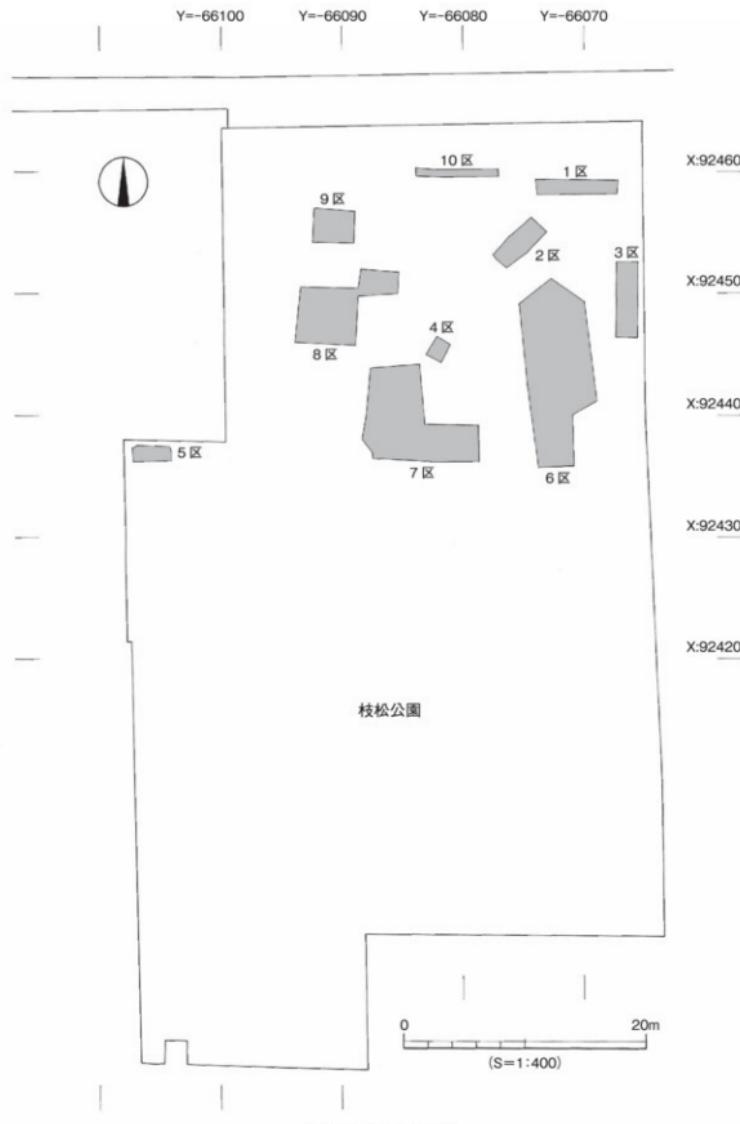
試掘調査の結果をうけ、公園北側の半分程度が調査対象地となった。このうち調査の範囲は、施設建設に伴い遺構に影響があると判断された箇所に限られた。このため小区画の調査となり、調査区は全体で10区画を数えた。区名については、掘削順に1区、2区、3区・・とした。調査面積は総面積2,901.56m²のうち約350m²である。

3. 調査の経過

野外調査は、1区～5区までの調査を平成20年3月17日～同年3月30日まで行い、6区～10区の調査を平成20年4月16日～同年5月30日まで行った。以下、調査工程を略記する。

- | | |
|----------|---|
| 3月17日(月) | 調査前状況の写真撮影の後、調査区（1区～5区）の設定を行う。発掘用具の準備・点検を行う。 |
| 3月18日(火) | 重機により1区～5区の掘削を行う。遺構検出作業を行い遺構検出状況の写真撮影を行う。3区でSK1を検出する。 |
| 3月21日(金) | 遺構検出写真を撮影後、遺構の掘り下げを開始する。土層確認のため2区、4区、5区にトレントを設定し掘削する。 |
| 3月24日(月) | 1区～3区の土層測量作業を行う。SK1より青磁碗出土する。 |
| 3月25日(火) | SK1の測量と遺物の取り上げを行う。1区・2区の測量作業を終了する。 |
| 3月26日(水) | 3区の測量作業を終了する。 |
| 3月27日(木) | 4区の測量作業を終了する。 |
| 3月28日(金) | 5区の測量作業を終了する。1区～5区の完掘状況の写真撮影を行う。撮影終了後、重機により埋め戻し作業を行う。 |
| 4月16日(水) | 調査区（6区～10区）の設定を行い、重機による掘削作業を行う。順次遺構検出作業を行う。 |
| 4月18日(金) | 6区の遺構検出作業と土層精査作業を行う。 |
| 4月21日(月) | 重機による掘削を終了する。7区の遺構検出作業を行う。 |

調査の概要



第3図 調査区位置図

層位

- 4月 22日(火) 8区の遺構検出作業と土層精査作業を行う。
- 4月 23日(水) 遺構検出作業の結果、6区で堅穴住居（S B 1）や柱穴、倒木跡、現代坑などを検出する。
- 4月 28日(月) 6区～10区の遺構検出作業を終了し、遺構配置図を作成する。
- 5月 2日(金) 高所作業車を使用して遺構検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、6区の遺構から掘り下げを行う。
- 5月 7日(水) 7区～10区の遺構・現代坑の掘削を開始する。
- 5月 12日(月) 各区の平面図、土層図の作成を行う。8区の拡張作業を行う。
- 5月 15日(木) S B 1の北側を拡張する。拡張の結果、大部分が現代坑によって失われている事を確認する。
- 5月 16日(金) 6区の遺構・現代坑の掘削を終了する。遺構と土層の測量作業を行う。
- 5月 19日(月) 8区・9区の測量作業を行う。
- 5月 20日(火) 10区の測量作業を行う。S B 1の掘削・測量・遺物の取り上げを終了する。
- 5月 22日(木) 各区の掘削・測量を終了する。
- 5月 23日(金) 高所作業車を使用して遺構完掘写真撮影を行う。
- 5月 26日(月) 重機による埋め戻し作業を行う。
- 5月 28日(水) 重機による埋め戻し作業を終了する。
- 5月 30日(金) 発掘用具の撤去と清掃を行い、現場作業を終了する。

4. 層位

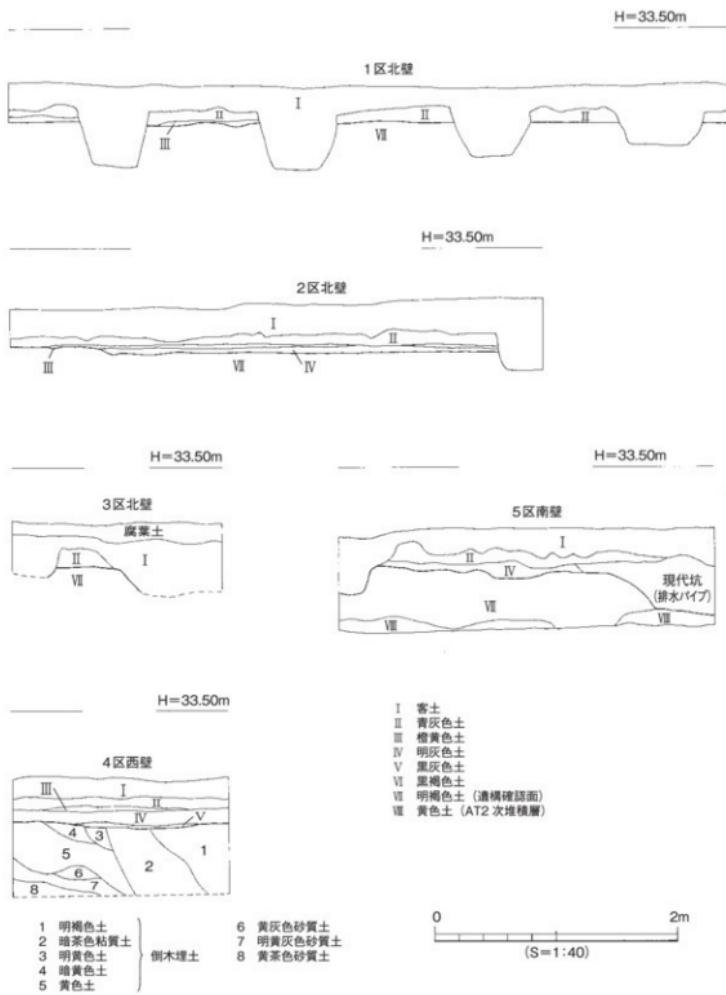
調査地周辺は、約22,000年～25,000年前に噴出・降下したA T火山灰と約6,300年前に噴出・降下した鬼界アカホヤ火山灰が広範に確認されている地域である。本調査地でもA T火山灰を確認した。

調査区の基本層序は上から第I層客土（層厚10～66cm）、第II層青灰色土（層厚2～18cm）、第III層橙黄色土（層厚約2cm）、第IV層明灰色土（層厚2～12cm）、第V層黒灰色土（層厚2～8cm）、第VI層黒褐色土（層厚約2cm）、第VII層明褐色土（層厚33～38cm）、第VIII層黄色土（層厚6～12cm）。このうち第IV層は中世の土器片が含まれる。第V層は周辺の調査により、弥生時代の遺構埋土色に似るが本調査では遺物の出土は無かった。東本遺跡4次調査の土層分析の成果より、第V層がA T火山灰の二次堆積層と考えられる。遺構の確認は第VII層上面で行った。

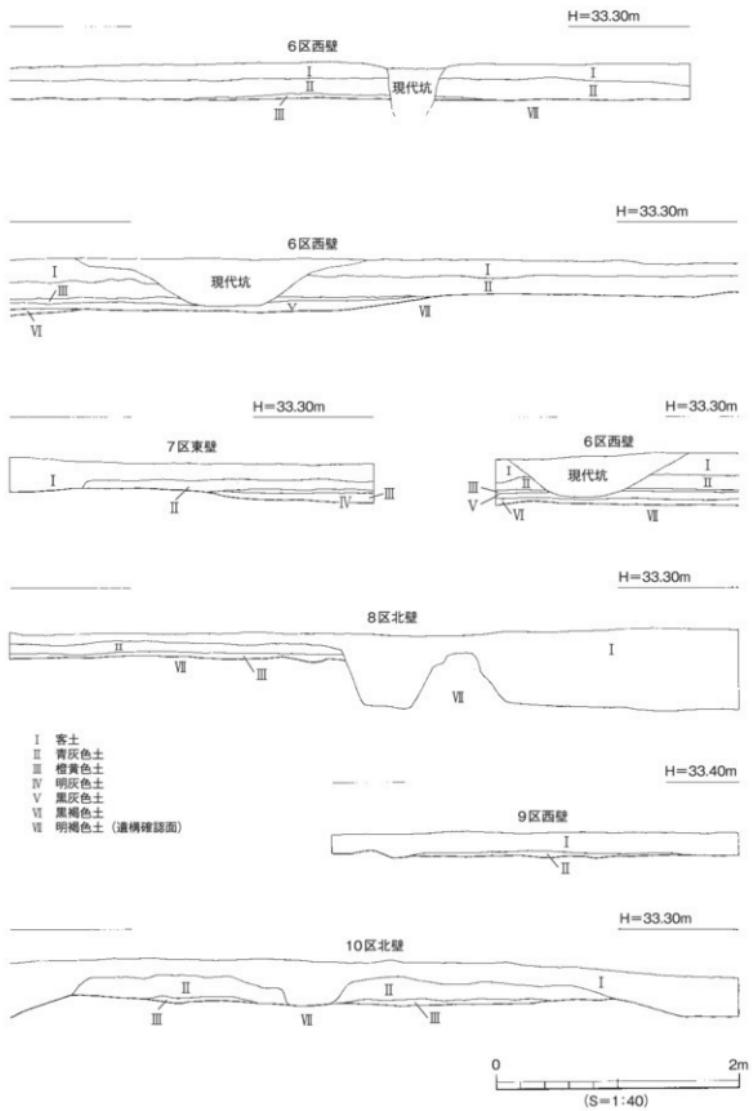
5. 遺構と遺物

1区～10区までの調査区は、公園施設の跡地であるため現代の掘削により現代坑が数多くみられた。この影響もあってか1区、2区、5区、9区、10区では遺構は検出しなかった。他の調査区では、これらの影響を受けながらも弥生時代と中世の遺構・遺物を検出した。検出した遺構は堅穴住居（S B）1棟、土坑（S K）1基、柱穴（S P）22基、溝（S D）1条、倒木跡（倒木）2基を検出した。遺物は弥生土器、土師器、青磁が出土した。各調査区で検出した現代坑は、出土遺物より昭和後半以降のものと考えられる。このため規模・数については触れていない。以下、各区ごとに記述する。

調査の概要

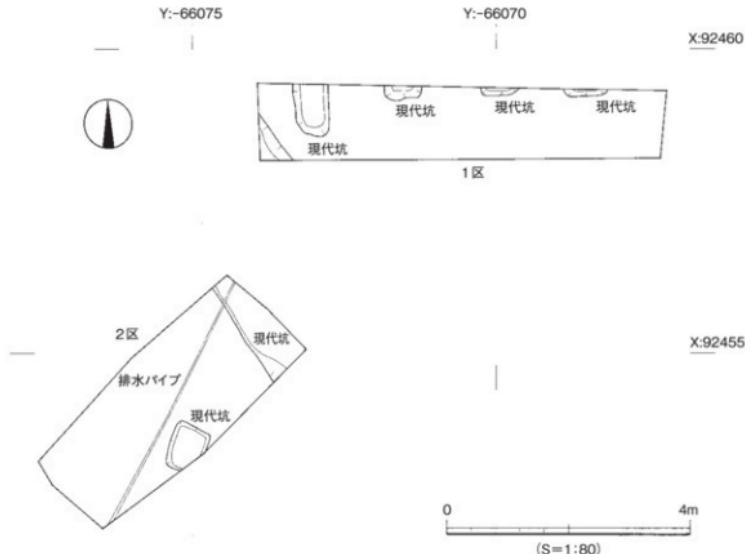


第4図 1区～5区土層図



第5図 6区～10区土層図

調査の概要



第6図 1区・2区測量図



第7図 2区表探遺物実測図

(1) 1区の調査 (第6図)

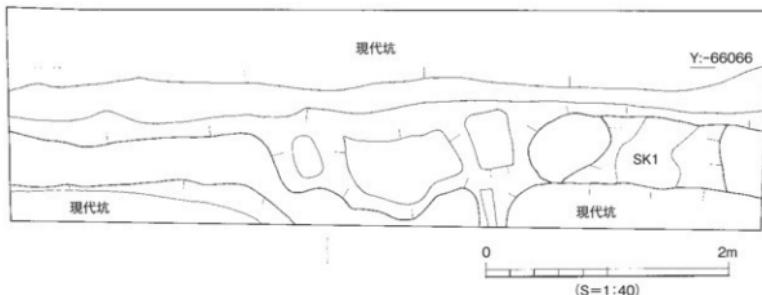
1区は調査地の北側に位置する。東西方向のトレンチ状の調査区で、調査前は鉄棒の跡地である。調査区の規模は東西 6.80 m、南北 1.28 m、遺構面である第Ⅶ層までの深さ 0.30 m を測る。遺構は、鉄棒の基礎跡などの現代坑 5基を検出したのみである。遺物は現代のコンクリート片が主であり、近世以前の遺物は出土しなかった。

(2) 2区の調査 (第6図)

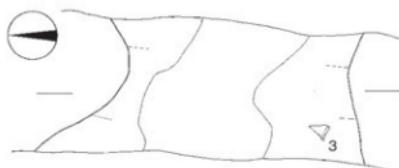
2区は、1区の南約 2 m に位置する。調査区の規模は長さ 4.36 m、幅 1.60 m ~ 2.00 m、遺構面である第Ⅷ層までの深さ 0.36 m ~ 0.42 m を測る。調査区内を南北方向に排水管が通る。遺構は、現代坑 2



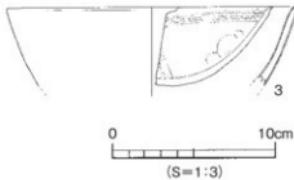
X:92450



第8図 3区測量図



第9図 SK1測量図



第10図 SK1出土遺物実測図

基を検出した。遺物は、重機による表土掘削時に土師器が出土した。

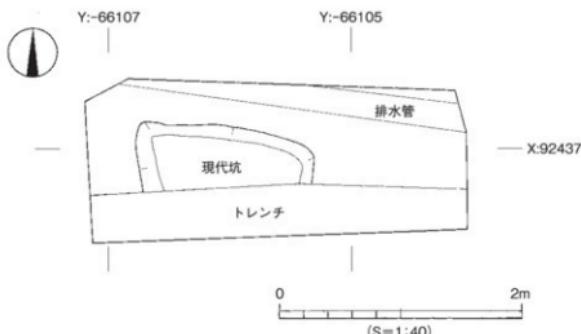
出土遺物（第7図）

1, 2は表探遺物で、土師器壺の口縁部片である。1は外上方に立ち上がる口縁部。2は内湾気味に立ち上がる口縁部である。時期は形態より13世紀～14世紀と考えている。

(3) 3区の調査（第8図）

3区は、調査地の東側に位置する。南北方向のトレンチ状の調査区で、調査前は植え込みの跡地である。調査区の規模は南北 6.20 m、東西 1.78 m、遺構面である第Ⅶ層までの深さ 0.36 mを測る。東壁と西壁はコンクリート擁壁となっているため、南北方向に擁壁工事に伴う現代坑がみられる。この

調査の概要



第11図 5区測量図

影響をうけて、第VII層は広範に削平されている。遺構は、土坑1基を検出した。

土坑（SK）

S K 1（第9図）

調査区南側で検出した。東側と西側は現代坑に削平され、全容は不明である。検出規模は長軸1.30m、短軸0.50m、深さ0.10mを測る。埋土は黒灰色土である。遺物は青磁が出土している。

出土遺物（第10図）

3は龍泉窯系の青磁碗である。口縁部は外反気味にたちあがる。内面の分割線はクシで施される。内部に飛雲文とみられる文様をもつ。森田・横田編年（1）のI-4にあたる。

時期 出土遺物より13世紀前半と考える。

（4）4区の調査（第17図）

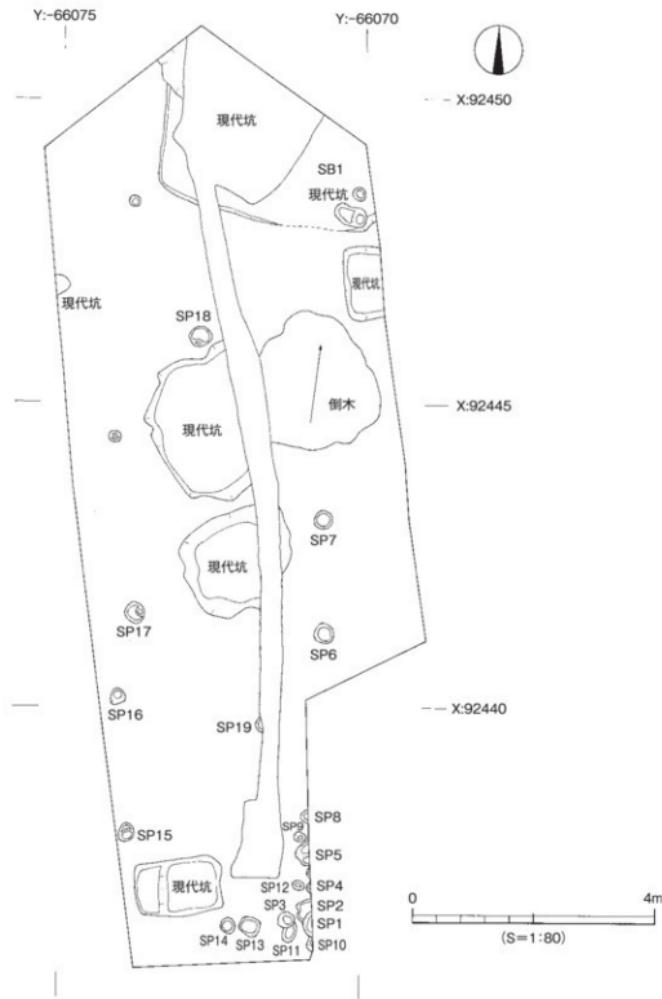
4区は、7区の北東部約1mに位置する小さな調査区である。調査区の規模は南北1.80m、東西1.30m～1.40mを測る。西壁沿いには、深さ0.96mの土層観察用のトレンチを設定した。遺構は、倒木跡1基と現代坑1基を検出した。倒木跡は、調査区外に広がり全容は不明である。倒れた方向は、トレンチの土層状況や平面観察により北東方向と考えられる。近世以前の遺物は、調査区内及びトレンチ内からも出土していない。

（5）5区の調査（第11図）

5区は、調査地の南西端に位置する。東西方向のトレンチ状の調査区で、調査前は植え込み跡地である。調査区の北壁沿いには配水管がとおる。調査区の規模は東西3.14m、南北1.18m～1.30m、遺構面である第VII層までの深さ0.32m～0.40mを測る。南壁沿いには、深さ0.88mの土層観察用のトレンチを設定した。遺構は、現代坑1基を検出したのみである。遺物は、調査区内及びトレンチ内からも出土していない。

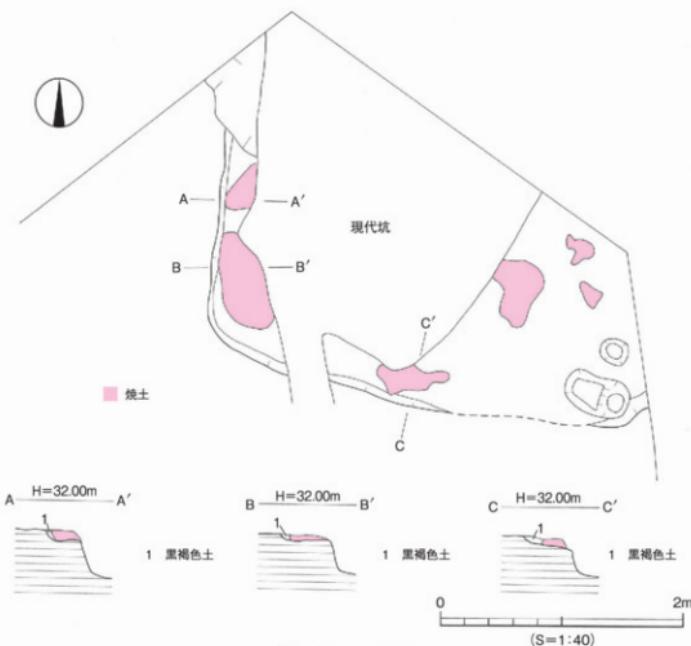
（6）6区の調査（第12図）

6区は、調査地の南東部に位置する。今回の調査区では最も広い調査区である。調査区の規模は南

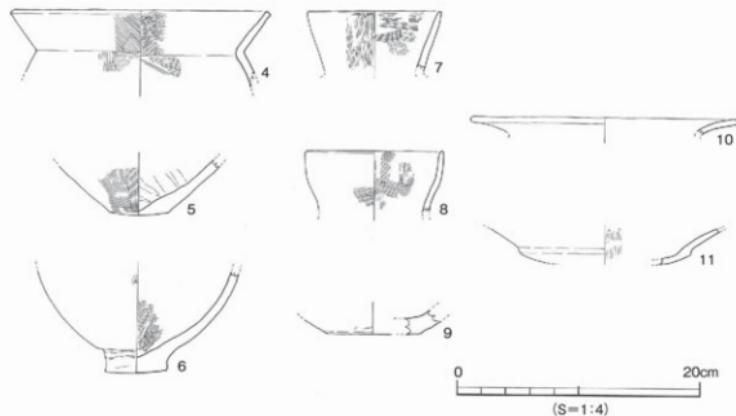


第12図 6区測量図

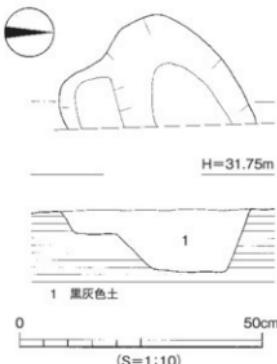
調査の概要



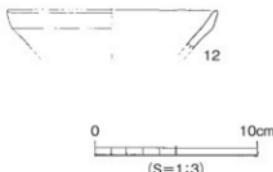
第13図 SB1測量図



第14図 SB1出土遺物実測図



第15図 SP5測量図



第16図 SP5出土遺物実測図

北15.36 m、東西3.00 m～5.28 m、深さ0.32 m～0.40 mを測る。遺構面である第VII層は、南方向に傾斜して低くなっている。検出した遺構は、竪穴住居1棟、柱穴19基のほか倒木跡1基、現代坑などを検出した。遺物は弥生土器、瓦器、土師器が出土している。主な遺構は以下である。

竪穴住居（S B）

S B 1（第13図）

調査区の北端で検出した。住居北側と北東部は調査区外となる。住居の遺存状況は、削平や現代坑のために壁体の上部や住居の内部は大きく失われている。平面形態は、隅丸方形を呈するものと考えられる。検出規模は東西3.52 m、南北1.90 m、深さ0.02 m～0.08 mを測る。埋土は黒褐色土である。床面では、6箇所に焼土を検出している。住居内では主柱穴、周壁溝、貼床などの施設は検出できなかった。住居南東部にみられるピット状の遺構は、現代の浅い掘り込みである。遺物は埋土より壺形土器、壺形土器、高環形土器が出土している。

出土遺物（第14図）

4～6は壺形土器。4の口縁部は外上方に開く。口縁端部は面をもつ。内外面ともハケ目調整を施す。5は平底の底部。6は突出する平底の底部。7～9は壺形土器。7は直口口縁壺。口縁部は外傾して上方にのびる。8は袋状口縁である。9は器壁の厚い平底の底部である。10は鉢形土器。口縁部は大きく水平気味に開く。口縁端部は丸い。11は高環形土器。環部は底部と口縁部の境に段をもつ。

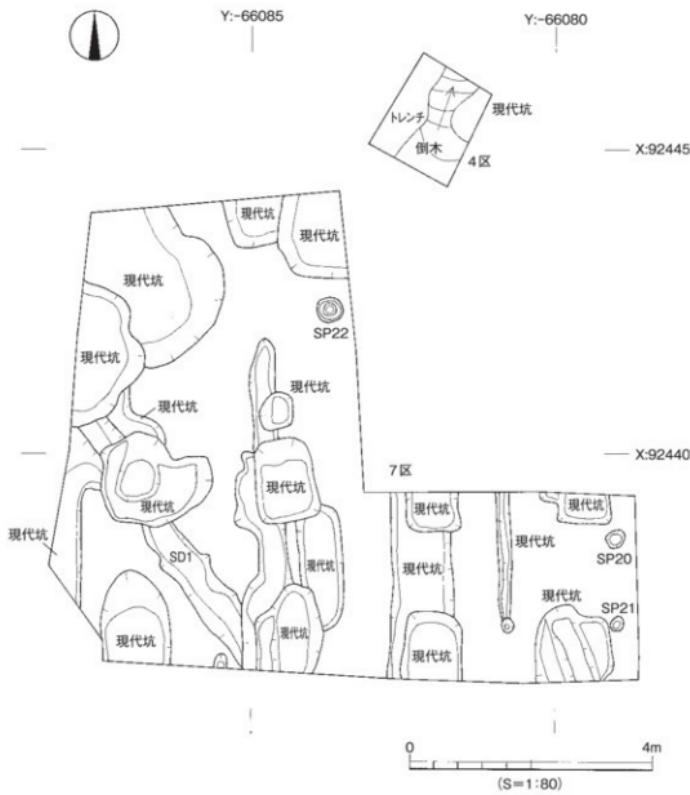
時期 出土遺物より弥生時代後期後葉と考える。

柱穴（S P）

6区では柱穴19基を検出している。検出した柱穴の埋土は、黒褐色土と黒灰色土に分けられる。遺物は、黒褐色土を埋土にもつ柱穴からの出土はなかった。黒灰色土を埋土にもつS P 5からは土師器が出土している。

S P 5（第15図）

調査区南東部の東壁沿いで検出した。東側は調査区外となり、全容は不明である。埋土は黒灰色土



第17図 4区・7区測量図

である。検出規模は長軸（南北）0.38 m、短軸（東西）0.23 m、深さ0.05 m～0.13 mを測る。二段掘りとなり南側が浅い。柱痕跡は検出していない。

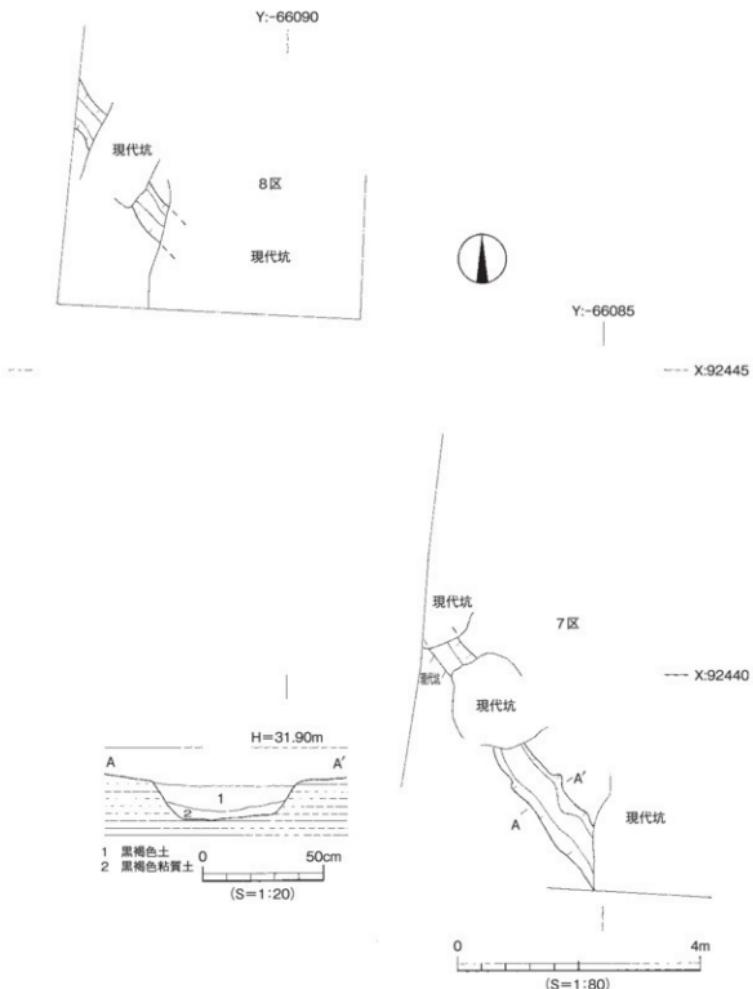
出土遺物（第16図）

12は土師器坏。口縁部外面直下に稜をもつ。

時期 口縁部の形態より13世紀～14世紀と考える。

倒木跡

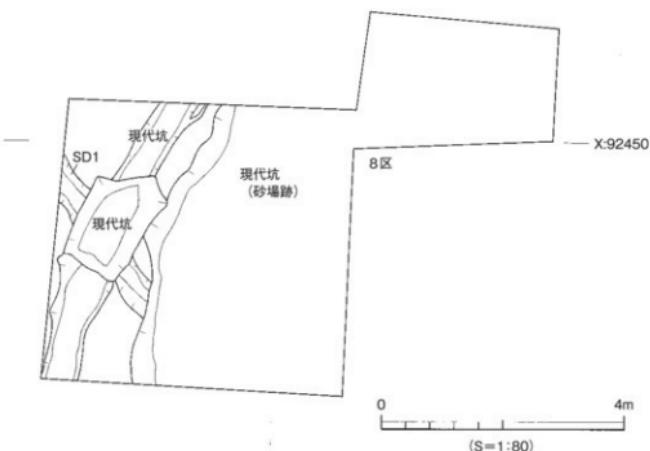
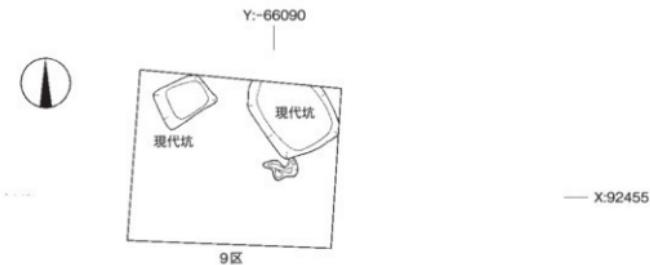
調査区の中央部で1基を検出した。検出規模は長軸2.30 m、短軸1.80 m、深さ0.50 mを測る。土層状況と平面観察により北東方向に倒れたものと考えられる。遺物は出土していない。



(7) 7区の調査 (第17図)

7区は、6区の西約5mに位置する。平面形はL字状を呈する調査区である。調査前は藤の花棚が設置されていた。調査区の規模は東西9.64m、南北7.80m、深さ0.20m~0.32mを測る。遺構面である第Ⅷ層は南方向に傾斜し低くなっている。検出した遺構は柱穴3基、溝1条のはか花棚の基礎跡など現代坑を多数検出した。近世以前の遺物としては溝より弥生土器片が出土している。

調査の概要



第19図 8区・9区測量図

柱穴 (S P)

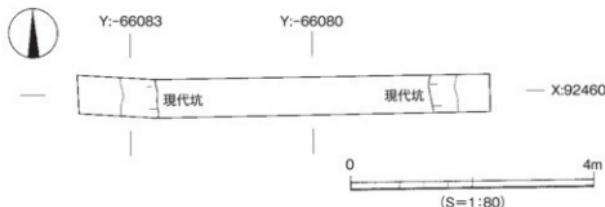
柱穴は S P 20～S P 22 の 3 基を検出した。埋土は黒褐色土を呈する。6 区で検出した黒褐色系の埋土をもつ柱穴の埋土色と同じである。各柱穴とも遺物の出土は無かった。

溝 (S D)

S D 1 (第 18 図)

調査区南西部での検出で、北西方向にのびる溝である。部分的に現代坑に切られている。この S D 1 は、北西方向の直線上にある 8 区でも検出している。7 区での検出規模は長さ 420 m、幅 0.48 m～0.74 m、深さ 0.21 m～0.27 m を測る。埋土は、上層と下層の 2 層に分けられる。上層は黒褐色土、下層は黒褐色粘質土である。遺物は、弥生土器と思われる小片が出土しているが図示するものはない。

時期 遺物の出土がないため時期は不明である。



第20図 10区測量図

(8) 8区の調査（第19図）

8区は、7区の北約3mに位置する。砂場があった場所で、調査区の東側半分以上が砂場跡となっている。調査区の規模は最長で東西8.00m、南北6.36m、遺構面である第VII層上面までの深さ0.18m～0.22mを測る。遺構は溝1条のはか、現代坑を検出した。近世以前の遺物は出土していない。

溝（SD）

SD 1（第18図）

7区で検出したSD 1の延長部である。現代坑により大部分が削平され失われている。検出規模は長さ2.40m、幅0.48m～0.52m、深さ0.25mを測る。遺物は出土していない。

(9) 9区の調査（第19図）

9区は、8区の北約3mに位置する。調査区の規模は南北2.80m、東西3.30m、深さ0.18m～0.20mを測る。遺構は、現代坑2基のみである。近世以前の遺物は出土していない。

(10) 10区の調査（第20図）

10区は、1区の西約3mに位置する。トレンチ状の調査区である。調査区の規模は東西6.80m、南北0.60m、遺構面である第VII層上面までの深さ0.30m～0.36mを測る。遺構は、現代坑2基である。近世以前の遺物は出土していない。

第3章 まとめ

今回の調査では、弥生時代と中世の遺構・遺物を確認した。弥生時代では、堅穴住居SB1の1棟がある。SB1の検出状況は、調査区の制約もあり住居南側と西側の壁体の一部を検出したのみで全体を検出できなかった。遺存状態は、現代の耕作による土壌の水平化や植林された樹木の撤去による現代坑などに削平され僅かに痕跡をとどめる状況であった。このため住居内施設である主柱穴、炉、周壁溝などの検出には至らなかった。住居平面形は、検出状況より方形(隅丸)を呈するものと考えられる。時期は、埋土より出土した土器の形態より後期後葉に比定されるものであった。

調査地のある枝松遺跡や東に接する東本遺跡では、都市開発に伴う調査が増加し弥生時代後期後葉～末葉にかけての堅穴住居が多数みつかり、この時期の集落地であったことが知られている。見つかった堅穴住居は枝松遺跡で6棟、東本遺跡では30棟あまりが報告されている。

検出された堅穴住居は平面形、規模、住居内施設（柱穴数、炉の形態、ベッド状遺構の有無、土坑の有無など）、住居廐棄形態（焼土・炭の有無、多量の土器廐棄など）に共通性と違いがみられている。このうち平面形と規模について概観すると平面形では円形、方形(隅丸)のはか、8角形を呈するものがある。規模では、※小型（直径または一辺4m未満）、中型（直径または一辺4m以上）、大型（直径または一辺7m以上）のものが検出されている。枝松遺跡内では平面形が方形を呈し、規模も中型のものに限られている。これに対し東本遺跡では小型から大型の住居が確認されている。大型の住居平面形は、円形が数棟確認され方形の住居も1棟確認されている。東本遺跡の大型の円形住居は、本調査地より北東約200mに位置する東部環状線と中村桑原線の交差点付近でその多くが検出されている。このうちの一棟より破鏡が出土するなど、住居の規模・出土遺物から集落の中心部は東本遺跡内に所在するものと考えられ、枝松遺跡は集落の西側から南側にかけての縁辺部にあたるものと考えられる。今回検出したSB1は、遺存状態が良好ではなかったが集落南西域の広がりを確認できた事は大きな成果であった。今後は枝松遺跡や東本遺跡における住居平面形態・規模・住居構造・住居廐棄形態・出土遺物・時期などの関係を整理し枝松遺跡・東本遺跡に展開する集落構造の解明を進めていかなければならない。

中世では、6区の南側において柱穴を多数検出した。これらの柱穴は、調査区外となる東側と南側に広がる様相が伺われた。周辺の調査においても数は多くないものの中世の遺構・遺物が検出されており、枝松遺跡内における中世集落の広がりや遺構の性格解明が課題である。

※堅穴住居の小型・中型・大型の区分については「東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査」松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター 1996を参考にした。

遺構・遺物一覧 一凡例一

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構一覧は相原浩二、遺物観察表は相原浩二、岩本美保、村上真由美、佐伯利枝が作成した。

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、口端→口端部、口上→口縁上部、口下→口縁下部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 微砂→微砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~3)→「1~3mmの石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表1 2区表採遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	坏	口径(13.0) 残高 27	口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナナフ	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	微砂 ○		11
2	坏	口径(12.4) 残高 34	口縁端部は尖る。	ナナフ	マメツ	褐灰色 灰白色	石・長(1~4) ○		11

表2 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
3	碗	口径(17.8) 残高 48	口縁部は内湾気味に立ち上がる。	施釉の有不明	施釉の有不明	灰オリーブ色 灰オリーブ色	素 ○		11

表3 SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
4	甕	口径(21.3) 残高 6.1	外上方にのびる口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口縁]ナナフ [口沿]ハナナフ(4cm)	ハケ(7mm/cm)→ナナフ	赤褐色 明赤褐色	石・長(1~3) ○		11
5	甕	底径(5.0) 残高 4.6	平底の小さな底部。	[底]ハナ(10mm/cm)→ ナナフ [底]ナナフ	ナナフ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~5) ○		11
6	甕	底径 5.1 残高 8.5	底部は突出する平底。	マメツ [底]ナナフ	ハケ(10mm/cm)→ナナフ	橙色 褐灰色	石・長(1~3) ○	黒斑	11
7	壺	口径(11.0) 残高 5.0	直口口縁。口縁部は丸くおさめる。	[口縁]ナナフ [口沿]ハナミギキ	ハケ(10mm/cm)→ナナフ にぶい赤褐色	赤褐色 にぶい赤褐色	石・長(1~3) ○		11
8	壺	口径(11.4) 残高 5.0	袋状の口縁部。	[口縁]ナナフ [口沿]ハナ(10mm/cm)→ナナフ →ナナフ	ハケ(10mm/cm)→ナナフ (表面無あり)	橙色 明褐色	石・長(1~2) ○		11
9	壺	底径(8.0) 残高 2.0	平底の底部。	(T.Jによる)ナナフ	(T.Jによる)ナナフ	にぶい褐色 にぶい黃褐色	石・長(1~2) ○		11
10	鉢	口径(22.1) 残高 1.3	外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	マメツ・ハカリ	マメツ・ハカリ	にぶい褐色 淡黄褐色	石・長(1~3) ○		11
11	高坏	残高 3.0	有段の坏身。	マメツ	ミガキ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~3) ○		11

表4 SP5出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
12	坏	口径(13.0) 残高 24	口縁部外面直下に棱をもつ。	マメツ	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~2) ○		11

表5 穴式住居 一覧

穴 (S B)	時 期	平面形	規 模(m) 長さ(長軸)×幅(短軸)×深さ	主柱穴 高床部 貼り床 炉 周壁溝				埋 土	出土遺物	備 考
				-	-	-	-			
1	弥生後期後業	隅丸方形	3.52×1.90×0.02~0.08	不明	-	-	-	黒褐色土	甕、壺、鉢	

表6 土坑 一覧

土坑 (S K)	地 区	平面形	断面形	規 模(m) 長さ(長軸)×幅(短軸)×深さ	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	3 区	(不整形)	皿状	(1.30×0.50×0.10)	黒灰色土	龍泉窯系青磁	13 c	

表7 溝 一覧

溝 (S D)	地 区	断面形	規 模(m) 長さ(長軸)×幅(短軸)×深さ	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	7 区~8 区	逆台形状	(4.20×0.48~0.74×0.21~0.27)	黒褐色土	弥生土器	弥生以降	

表8 柱穴 一覧

柱穴 (S P)	地 区	平面形	規 模(m) 長さ(長軸)×幅(短軸)×深さ	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	6 区	(楕円形)	(0.42×0.16×0.179)	黒灰色土		-	
2	6 区	(不整形)	(0.42×0.22×0.013)	黒灰色土		-	
3	6 区	円形	0.28×0.28×0.153	黒灰色土		-	
4	6 区	(円形)	(0.16×0.05×0.044)	黒灰色土		-	
5	6 区	(不整形)	(0.38×0.23×0.05~0.13)	黒灰色土	土師器	-	
6	6 区	円形	0.35×0.32×0.26	黒灰色土		-	
7	6 区	円形	0.33×0.28×0.31	黒灰色土		-	
8	6 区	(円形)	(0.22×0.13×0.20)	黒灰色土		-	
9	6 区	円形	0.21×0.17×0.111	黒灰色土		-	
10	6 区	(不整形)	(0.22×0.11×0.155)	黒灰色土		-	
11	6 区	楕円形	0.36×0.20×0.056	黒灰色土		-	
12	6 区	楕円形	0.20×0.14×0.078	黒灰色土		-	
13	6 区	円形	0.33×0.29×0.208	黒灰色土		-	
14	6 区	円形	0.25×0.23×0.05	黒灰色土		-	
15	6 区	円形	0.30×0.22×0.19	黒褐色土		-	
16	6 区	円形	0.28×0.19×0.229	黒褐色土		-	
17	6 区	円形	0.32×0.32×0.20	黒褐色土		-	
18	6 区	隅丸方形	0.38×0.26×0.036	黒褐色土		-	
19	6 区	(円形)	(0.23×0.13×0.28)	黒褐色土		-	
20	7 区	円形	0.33×0.28×0.277	黒褐色土		-	
21	7 区	円形	0.26×0.20×0.104	黒褐色土		-	
22	7 区	円形	0.44×0.42×0.30	黒褐色土		-	

写 真 図 版

枝松遺跡11次調査

写真図版例言

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド 45A	レンズ	スーパー・アンギュロン	90mm他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67	55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール	28～85mm他
フィルム	白 黒 プラスXパン・ネオパンSS・アクロス			
	カラー RDP III			

2. 遺物は、4×5判で撮影した。

使用機材：

カメラ	トヨビュ- 45G
レンズ	ジンマーS 240mm F5.6他
ストロボ	コメット／CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウェイトスタンド 101
フィルム	白 黒 ネオパンアクロス

3. 單色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー 450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RCペーパー

4. 製 版 写真図版 175 線

印 刷	オフセット印刷
用 紙	マットコート 110kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1～18 『報告書制作ガイド』

【大西朋子】



1. 調査前風景（南西より）



2. 1区完掘状況（西より）



1. 2区完掘状況（南より）



2. 3区全景（北より）



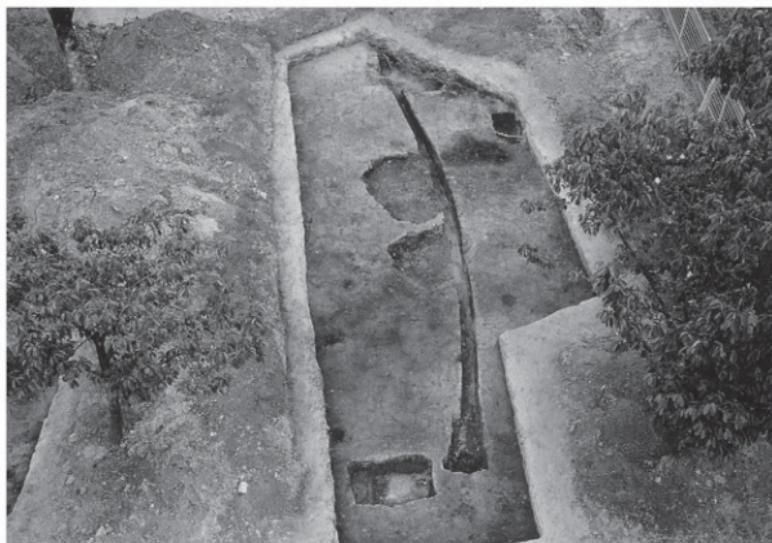
1. SK1検出状況（北より）



2. 4区全景（南より）



1. 5区完掘状況（東より）



2. 6区遺構検出状況（南より）



1. SB1検出状況（南東より）



2. SB1完掘状況（南西より）



1. 6区倒木土層（西より）



2. 6区完掘状況（南西より）



1. 7区遺構検出状況（南より）



2. SD1検出状況（南東より）



1. 7区完掘状況（南より）



2. 8区完掘状況（西より）



1. 8区発掘状況（南東より）



2. 9区発掘状況（南東より）



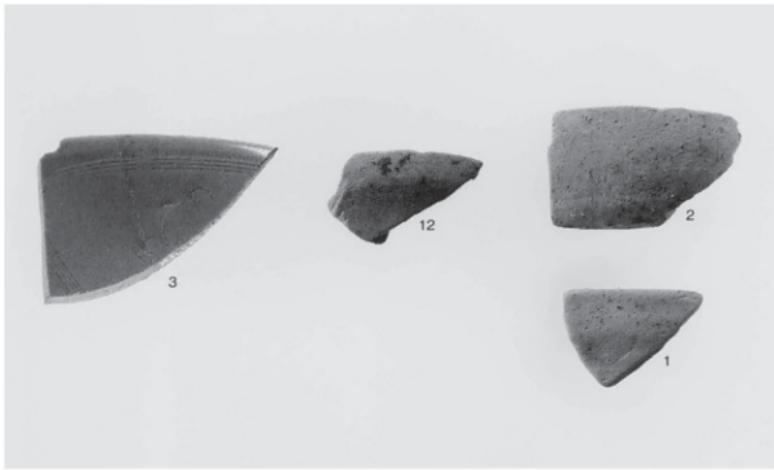
1. 遺跡検討会風景（南東より）



2. 6区～10区発掘状況（南より）



1. SB1出土遺物



2. SK1出土遺物(3)、SP5出土遺物(12)、2区表採遺物(1·2)

報告書抄録

松山市文化財調査報告書 第129集

枝 松 遺 跡 —11次調査—

平成21年3月31日 発行

編集
発行

財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

松山市教育委員会

〒790-0003 松山市三番町6丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

印刷 原印刷株式会社

〒790-0056 松山市土居田町396-6
TEL (089) 974-8711
